

2017年8月13日(日)

説教:「私の祈り、私たちの祈り」

聖書:詩編6:2~11

詩編は古くから教会でなじみ深く、様々な形で用いられてきました。詩編が元になっている讃美歌も多くあります。イエスご自身も詩編を引用しています。たとえば、最後の晩餐の後に弟子たちと共にオリブ山に向かっていくときに歌った讃美歌は詩編 115 篇から 118 篇であると言われています。詩編は共同体の祈り、讃美として脈々と歌い継がれてきました。

しかし他方で個人の祈りとしても用いられてきました。信徒一人一人の信仰を培う書として用いられ、喜び、悲しみの中でも常に私たちを神へと導く道しるべとして大切な役割を果たして来ました。

ですから私たちが詩編を読むとき、神に自分自身の救いを祈ると同時に、傷つき倒れている友のためにも祈りをささげているということです。

この作者は今まさに死に瀕しています。「私を憐れんでください、主よ、弱り果てたのです、この私は。私をお癒してください…主よ、いつまでなのでしょう…わが目は、悲しみのゆえに弱り、私を攻める者すべてによって衰えました。」と訴えます。それに先立って「あなたの怒りのうちに私を罰しないでください」という訴えが神に向かって投げかけられています。人の生も、死も神のご支配のもとにあるという理解です。作者は神に背く者である自分自身の姿を認め、同時に他のいかなるものも神としないという決断と神への信頼に立ち返っています。そうであればこそこの歌は、最後は救いの確信に満ちた希望の言葉で締めくくられています。

「私から離れよ、悪事をなす者らはみな。主側が嘆きの声を聞いたのだ…わが敵はみな、引き返し、恥をかけ、たちまちに。」

神が、死そのもと、死に追いやろうとする敵とに打ち勝つ方であることを、今やこの作者は知っており神の恵みを、高らかに歌い上げています。

私たちはこの詩を個人の祈りとしてだけでなく、共同体全体の祈りとして共に祈ります。「わたし」という一人称は常に「わたしたち」という意味を含みます。それは別の面から言い換えれば、隣人の身に起きたことを「他人事」としないということ。共に生き、共に神によって立ち上がらされていく、それが教会です。

とはいえ沖縄は常に「他人事」として放置されてきた歴史を持ちます。イエス・キリストは常に、弱くされ、弾圧され、奪われ、苦しめられている者の側に立って、私たちの祈りを共に祈ってくださっていることを覚えたいと思います。(國分美生)